

読書

舞鶴湾の風

菱崎 博 著



本の泉社・2200円

ひしざき・ひろし
49年生まれ。日本民主主義文学会会員。『西からの夜明け』、『京都新発見』(共著)ほか

差別の苦難から人間解放めざす

本書は、言語道断な部落差別に抗して、新しいコミュニティを造り上げた鳥取の人びとの物語だ。そこには、人間の尊厳と解放をめざすヒューマニズムの精神が、満ちあふれている。日露戦争只中の明治38年春、舞鶴に紛れた山間に走る線路の上を、赤子を連れた因幡・勝田

村の若者たちが歩いている。維新政府から「新平民」の呼称を与えられたものの、差別と偏見に苦しむ地獄のような日々は変わらない。一念発起した彼らは42里(約165km)の彼方にある京都の舞鶴で一旗掲げるために、丸5日歩き続けていた。

だが軍港建設で活気づく舞鶴は、約束の土地ではなかった。彼らを待っていたのは、命の保障もない過酷な労働と差別が行く建設現場であった。

それでも彼らは、荒戸の谷間に掘立小屋を建て、身を寄せあってしごとく生き抜く。

「世間が私たちを受け入れないのなら、私たちがどうするかです」と語る因幡から来た僧侶の「生命の宣言」をよりどころにして、荒戸の人びとは、頼母子講を起こして互いに助け合い、僧侶が開いた学習塾に子どもを通わせる。

大正10年3月、奈良県柏原で

青年たちが水平社を創立した。伝え知った彼らは呼応して舞鶴八東社を結成し、会社相手のたたかいに挑んでいく。

若者たちの中で一番背が高く、誰よりも力持ちの美代子像が鮮やかだ。気風が良くて情が深く、苦勞を厭わない。事故で母親を亡くした子どもとの親代わりを務めるかたわら、過酷な労働の毎日に、ともすれば悲観的になる男たちを鼓舞する。会社との交渉では、「仕事中に命を落とした人夫と残された家の者に、葬式代と仕事を回して欲しいと言っとりますんや」と、先頭に立って一歩も引かない。作者は美代子の姿に、この国の明日を託しているようだ。記憶に残る長編として、多くの人に薦めたい。

評者 松木 新 文芸評論家